

新潟県の子どもの姿 — 断片 —

編 集 部

△万引きが多い▽ 万引きを平気でやる。人目の届かない所へ行こうとするからわかる。店の見張りが必要でコスト高になるから、子ども商品は置かないようにしている。
(商店主)

少年達が、5月、都の赤羽公園のベンチに休んでいた清掃作業員をホームレスとみて、ライターオイルで火をつけて殺そうとした。「ゴミのよ

うなもの」「街がきれいになる」と言ったという。背筋が凍るような話だ。特に異質な子どもたちであろうか？いまの子どもたちの内に潜むものが先鋭的にあらわれていないだろうか。子どもたちへのため息や愚痴はあちこちに聞く。これは今に始まったことではない。ギリシャ・ローマの古代から「今の若者は」といわれて

きた。しかし、未知の世界に向かって急激に変わる社会で子ども達の成長も従来の尺度では測れなくなってきた。

とりあえず、周りの人々の子どもについての否定的な声に耳を傾けてみたい。子どもたちをめぐる問題状況を考える、問題提起としたい。そこから子どもたちの発達への支援の対応をひろく、深く考える素材にできればと願っている。

以下は大人たちがみた新潟の子どもたちに関わる断片の数々である。

△これで高校生？▽ (バイトの高校生は) 変わったななんてものじゃないこてね (ないですね)。全然ダメ。10分前に出社するよう言っても20分過ぎても来ない。連絡もない。電話するとこれから行くと謝罪もない。日々こんな調子。時間守らないのはあたりまえ。悪いという思いもない。
(スタンド経営者)

△おつり計算できない▽ おつりの計算ができない。550円に1050円出されるともうダメ。実社会で通用するとは思えない。10年前の

バイト生と全然違う。(商店経営)

△さっさと帰る▽当施設では在園者が亡くなられると関係者、皆で見送りする。若い介護士は勤務時間が終わったと、20分の時間が待たなくてさっさと帰ってしまった。しかも当人担当の在園者だった。信じられない。(介護士)

△アレルギーが増えた▽子どもたちにはアレルギーが大変増えている。個々対応の献立が大変だ。私たちの子どもの頃は聞いたことがなかったのに。(保育園食事係)

△親がスゴイ▽子どもというより親が問題。なんだかんだといちゃもんをつけてくる。誰も気づかなかつたかすかなひつかいた跡くらいの傷さえ「傷を負わせた」と猛烈に抗議し

てくる。

(保育園食事係)

△対応が大変▽不登校児への対応が大変になってきている。カウンセリング対応中心では通用しなくなってきている。

ADHD、広汎性発達障害、アスペルガー障害、自閉症等々からくる行動障害、社会性障害からくる不登校児が多くなってきた。対応が一人一人全部違う。公式もない。テキストもない。ほんとうに大変だ。(不登校生徒担当教員)

△私の体験は役にたたない▽私の今まで体験からのアドバイスは、いまの子どもにも親にも通用しない。当の子どもも親も、とにかく明るくし、不登校を気にしていない。アツケラカンとしている。卒業しても派

遣、バイト、フリーター等々社会的に認可されているせいだろうか。(不登校親の会の母)

△不登校が変わった▽不登校の形態も多様化している。登校や勉強は強制されない。過ごし方も適応教室等多様である。大規模中学校で不登校生は20名を越えるが、学校に関われない生徒は一人しかない。(中学校教員)

△譲れない▽(歩道付きのT字路を登校時の児童たちが列をなす)ノンロ車の前を横切る…止まって譲る児童がいない。逆にわざとゆっくり歩く子さえいる。(マイカー通勤者)
△字が書けない▽いやあ、まいった。レジの若者に領収書を求めたら字が書けない。卵一箱の卵が書けな

くてひらがなにしてもらった、次は箱が書けなくて教えてやった。

(一消費者)

△発達障害児童が多い▽ 軽度発達障害の子が6%いると文科省は公表している。が、どうみても10%の子が該当するというのが実感である。しかも、一人一人がとても個性的で、ADHD、LD、アスペルガー症候群などと簡単にくくれない。何故そうなったのかは、長年教師の私たちでもさっぱり分からない。

(小学校教員)

△特別指導体制を▽ A君は、「心が暗くなった」という表現に、「心を見せて」と言い、さらに「暗くなる」とは黒くなるの」と聞いてくる。はじめにそう受け取っている。A君を教育する特別な体制が必要である。

学校は人も予算もあまりに少ない。

(小学校教員)

△障害は改善する▽ 軽度ADHDの孫は、小学校4年生頃には粗暴ですぐキレた。友達にも乱暴にあたり、物を投げつけた。その際叱られて、N市の目抜き通りを小雨のなか4キロを裸足で歩いた。声をかけてくれたのは、老人が一人だったという。子どもだけでなく大人も変わってしまったのではないか。いまは中学生になり、部活動で汗を流している。目立つ行動はほとんどなくなつた。成長すると変わるのだと信頼できる。

(60歳代祖母)

△親が変わってきている▽ とにかく親がおかしい。ここ4、5年来急速に変わってきた。面談最中にケータイ取り出しメール打っている親は

珍しくない。まるで子どもが子どもを育てている。そんな子どもたちが成長したとき怖い。

(保育園食事係)

△考えよう親たちよ▽ 母親と父親の役割が入れ替わっている。母がヒステリックに叱りつけ、父が抱き上げあやしている。

(保育園食事係)

△多いよ発達障害▽ 勤務校では知能正常なのに自閉症と見える(アスペルガー症候群)の生徒が1割を超えている。

(中学校教員)

△幼児の本音は?▽ 地域との交流が密接な保育園がある。おじいちゃんや年中組に紙芝居をしてくれた。その時である。「先生、遊びたい!」「先生、プールに入りたい」と数人の子が切実な声で保育士にせがんだ。大人と子どもの価値観のズレがはな

はだしいのではないか。(一市民)

* * *

これらに対して子どもたちの意見を聞かなければならない。次の一例のように。次回にそれを試みたい。

△もつと聞いてよ▽「生徒は親や教師をなめきっているんだよ。表面ではいい子ぶっているが、なに一つ話を聞こうとしていないんだよ」「大人は本気で世の中のことを教えてくれないし、悪いと知っても本気で叱ってくれないからね」「みんないろんな話を聞いてもらいたいんだよ」

(中学生)



地域のよさを共に学び、

文化を育てる運動

—木曾福島町長講演から—

②

もう一つは、住民と共に学ぶ「木曾学」である。地域学という意味ではなく、木曾学運動である。

「市場主義とグローバルイズム」が吹き荒れる今日の時代では農山村は衰退を余儀なくされ、時代の落伍者として捨てられようとしている。

しかし、そうした時代がずっと続くわけがない。必ず農山村や伝統・技術・文化が必要となり、全国的な運動として農山村のローカルな文化を再評価する時期が来るのではないかと語り、山村復権運動を提唱する。木曾福島町の地域に根ざした

文化や技術、人材を活用して地域経済の再生を目指す「木曾学研究所」を立ち上げ、毎年「木曾学シンポジウム」を開催している。

第1回のシンポには佐々木雅幸氏(大阪府立大)の講演を始め、著名な学者・文化人を招き、「木曾福島ならどうする」を視点に、住民とともに学びながら、地域づくりをすすめている。伝統文化の保存発掘、衰退した漆器や木工業の発展継承、旧中山道文化の結合した観光など、様々な運動に広がりを見せている。

新潟でも平成の大合併で県内112の市町村が35自治体に激減した。それぞれ自治体での新しい町づくりがすすんでいる。この木曾福島町の取り組みを大いに学びたい。

(内山)